

称呼類似の再検討（2）

第1章 モーラの増加が与える影響（2／2）



会員 須賀 総夫

要 約

前報では、類否を検討するふたつの称呼の間に、V音節またはCV音節の加入によるモーラ数の増加がみられるときに、それが称呼を非類似にする率がどの程度であるかのデータを示して、いずれもかなり高い非類似化率をもたらすことを述べた。ところが、同じCV音節の加入であっても、称呼の語尾に「ス」または「ズ」が付加した場合には、非類似化率が顕著に低くなる。また、語頭に英語の定冠詞「THE」が載った場合、その存在はほとんど顧みられないといってよいほどである。本報では、これらのデータを示して、前報のデータとの差異を考える。

目次

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 称呼の類否判断に影響を与える諸因子 2. 前提となるいくつかの概念 3. 称呼におけるモーラ数 4. V音節の加入によるモーラの増加が与える影響 | <ol style="list-style-type: none"> 5. CV音節の加入によるモーラの増加が与える影響
(以上 Vol.65 No.1) 6. 語尾に付加した「ス」または「ズ」のもつ特殊性 7. 語頭に付加した「THE」の重み 8. この章の結論 |
|--|--|

6. 語尾に付加した「ス」または「ズ」のもつ特殊性

前報に掲げた「表1-4 CV音節の加入（1／4）」において、スまたはズの加入のうちで、これらの音節が語尾に付加された場合については、「別の表に記載」と記してある。その理由は、これらの場合は事例が多く、とくに「ス」の付加はきわめて多いことにある。しかしそれ以外にも、「ス」または「ズ」が語頭に載置され、または語中に挿入された場合にくらべると、語尾への付加は称呼を非類似にすることが格段に少ない、という特殊な性格がある点で特異である。

6. 1 「ス」の付加

まず「ス」の加入についてみると、前報の表1-4において、語頭への載置および語中への挿入の事例数は合わせて9件であり、そのうちで類似が1件しか

なく、8件が非類似である。それに対し、「ス」が語尾に付加した場合は、表2-1に掲げるように多数の事例があり、しかも、モーラ数の増加の条件により、つまり付加がモーラ数の少ないところで起っているか、多いところで起っているかによって、類似と非類似の割合が、つぎの表2-2のように変化する。

つまり、語尾への「ス」の付加は、それによりモーラ数を1増加させることにより称呼を非類似にする力が、語頭または語中にくらべて格段に低く、かつ、その非類似にする力は、モーラ数が2→3のように小さいうちは強いが、モーラ数が大きくなるにつれて顕著に弱まり、5→6以上では非類似にする力がほとんどなくなるということである。このように、「ス」が語尾に付加された場合には、語中に挿入された場合に称呼を確実に非類似に転換させる働きがあるのと対照的であって、様相が異なる。

し、6→7以上では14例中の11例(78%)に達する。

「〜ック」→「〜ックス」を類似・非類似に分けてみると、4→5では類似30例中の20例がこのパターンであり、非類似12例中では4例である。5→6では、類似34例中の24例であるが、非類似の3例も同じパターンである。6→7では、類似10例の9例がこのパターンであるが、ただ1例の非類似も同様である。

このように、「〜ック」→「〜ックス」のパターンは、それゆえ類似の判断を招くとは限らないとはいえ、類似になりやすいということはいえそうである。

「〜ック」に「ス」が付加することが、音韻としてどのように受け止められるのであろうかということを考えると、どうも単純に/Qku/→/Qkusu/ (Qは促音)となるのではなさそうである。少なくとも「〜ック」の「ク」の母音[u]は、無声化するであろう。そうすると、「〜ックス」の「ス」の母音[u]は脱落すると考えられ、最終的には/Qks/となって

表2-3 語尾への「ズ」の付加によるモーラの増加

付加音	モーラの増加	類 似		非 類 似		
		商標 A	類 否	商標 A	類 否	商標 B
ズ	2→3			トイ シム	×	トイズ シムズ
ズ	3→4	ウイン ブーン シャワー パワー メガー タイム コラム アダム	≡ = ウインズ = ブーンズ = シャワーズ = パワーズ = メガーズ = タイムズ = コラムズ = アダムズ	ウイン ブーン ツイン ティーン シアー クルー	×	ウインズ ブーンズ ツインズ ティーンズ シアーズ クルーズ
ズ	4→5	パターン ドラゴン ヘルマン マスター ビューリー ランナー フッター ワナビー ブラザー ビューティー マキシム ビートル キャンベル	= = パターンズ = ドラゴンズ = ヘルマンズ = マスターズ = ビューリーズ = ランナーズ = フッターズ = ワナビーズ = ブラザーズ = ビューティーズ = マキシムズ = ビートルズ = キャンベルズ	カラマン シーズン カルシー マヨラー イクシー シナジー ビートル ビックス	×	カラマンズ シーズンズ カルシーズ マヨラーズ イクシーズ シナジーズ ビートルズ ビックスズ
ズ	5→6	エクспан ソリューション フライデー スパイアー ウエンディー ランチャブル クリスピー レオナルド レインジャー クローバー ブランニュー イーホーム グッドデイ	= = エクспанズ = ソリューションズ = フライデーズ = スパイアーズ = ウエンディーズ = ランチャブルズ = クリスピーズ = レオナルドズ = レインジャーズ = クローバーズ = ブランニューズ = イーホームズ = グッドデイズ	カンボリン シーブリー クロスビー	×	カンボリンズ シーブリーズ クロスビーズ

いると思われる。結局、「ス」が付加したと試してみても、称呼の末尾に短い持続時間をもった摩擦音[s]が聞こえるという変化であって、モーラの増加が実際には生じていないと考えざるを得ない。

ただし、そう考えると、形式上にせよモーラ数の増加が考えられる2→3ないし3→4の場合に、高い率で非類似となるという事実が、モーラ数の増加ということでは説明できなくなる。やはり、称呼を構成する音節の数が少ないうちは、短い持続時間をもった摩擦音[s]であるといっても、それが聞こえることは、称呼が与える印象を異ならせるに十分である、という説明をすることになる。

6.3 語尾への「ズ」の付加

語尾に「ズ」が付加した場合は、表2-3に示すとおりであって、事例数は、「ス」の付加に較べれば少ないが、それでもかなり多数ある。

表2-3 THEの付加

商標A	類否	商標B	商標A	類否	商標B
ART SYSTEM	=	ATHE ART			
ベーシック／BASIC	=	ザ・ベーシック			
BEATLE	=	THE／BEATLES			
THE BENK	=	ベンク			
BODY SHOP	=	THE BODTY SHOP			
THE／BOX	=	VOX			
THE BRIDGE	=	ブリッジ／BRIDGE			
ザカーニバル	=	CARNIVAL／カーニバル			
THE CAT	≠	CAT	THE CAT	×	キヤット／CAT
Cheese Cake Factory	=	The Cheesecake Factory			
THE CHOICE／ザ・チョイス	=	CHOICE	The Class	×	CLASS
THE/COFFEE/CLUB	=	Coffee club			
The Cro-Magnons	=	クロマニヨン			
ダイソー	=	ザダイソー			
The DigiCon.	=	デジコン	ザディナー ／THE DINNER	×	ディナーカレー
ザ・ファイル／THE FILE	=	E-File			
THE LIMITED ／ザリミテッド	=	LIMITED	ザライン ／THE LINE	×	LINE
			ザ・ナイスマガジン	×	NAIS（ナイス）
パップス	=	ザ・パップス			
The Parks／ザパークス	=	パークス／PARKS			
THE PENGUIN	=	ペンギン			
THE PHOENIX	=	フェニックス			
THE QUEEN	=	QUEEN			
			THE RIVER	×	リバー
MAGICALSHOE-SOURCE	=	THE SHOESOURCE			
SCOTT HOUSE ／スコットハウス	=	THESCOTCH HOUSE／ ザスコッチハウス			
STAR	=	THE STAR	THE SUN'S	×	SUNS／サンズ
The Tuxed Club	=	TUXEDOCLUB			
ザウェイブ／THE WAVE	=	WAVE			
THE WORLD	=	WORLD			

「特殊性」という意味は、商標「X」と商標「THE + X」との類否判断に当たって、

- 1) 称呼として、この「THE」を除外した称呼（つまり「X」）しか生じないと認定（当然に称呼は類似する）することがあり、
- 2) 称呼として、この「THE」を加えた「ザX」が生じると認定しておきながら、それに加えて「X」だけの称呼が生じることがあり、結果として称呼類似である、

という判断がみられることをいう。

形式的にみれば、語頭に有声の破擦音ないし摩擦音を含む「ザ」または「ジ」が付加すれば、その印象は強烈であって、CV音節が語頭に付加した場合は、限られた例外を除いて非類似となっているということにかんがみれば、問題なく非類似になるはずである。それにもかかわらず類似とされるのは、称呼に関して「ザ」（または「ジ」）という音節の加入がない、という取り扱いをすることにほかならない。つまり、「THE」の存在は、「THE + X」の称呼のモーラ数を増加させ

ていない、ということになる。

8. この章の結論

以上、商標の称呼にV音節（母音だけの音節）またはCV音節（子音+母音の音節）が加入して、称呼のモーラ数が増加した場合に、類否判断がどのような影響を受けるかを、過去20年間の審決について観察した。

V音節が加入した場合、称呼は高い率で非類似に転換する。そのようすは、つぎのとおりである。

ア（100%）>エ（86%）>オ（69%）>ウ（67%）
>イ（59%） 平均74%

「イ」の加入の場合に非類似になる率が低くなるのは、二重母音の形成によりモーラ増の影響が減殺されるのではないかと考えたが、日本語の二重母音として確実視されている「アイ」「オイ」「ウイ」を形成する可能性がある場合とそうでない場合とで、差は認められなかった。

CV 音節が加入した場合もまた、称呼は高い率で非類似に転換する。

ただし、CV 音節の加入が「ス」または「ズ」の語尾への付加である場合には、一般に、非類似に転換する度合は明確に低くなり、類似のまま残る方が多い。事例が多数あり、モーラ数の増加が与える影響が、基礎となる称呼のモーラ数が小さいうちは強く、モーラ数が大きくなるにつれて弱まって行くありさまが、はっきりと観察できる。

語尾に付加する CV 音節が「ス」の場合に多く見られる付加は、「～ク」→「～クス」であって、後者の末尾は、[～ kusu] ではなく、[～ ksu] またはさらに [～ ks] となって、「ス」の付加にもかかわらず、称呼のモーラ数は増加しないことが考えられ、それが称呼を類似に止めているものと考えられる。

語尾に付加する CV 音節が、有声の子音を伴う「ズ」である場合も、無声の子音を伴う「ス」の場合に比べて非類似になる率は高くない。

「ス」または「ズ」の語尾への付加が称呼を非類似にしない理由には、このような音韻感覚的な理由に加えて、単数複数の観念または所有の観念が加わっても、基礎となるものが観念的に変化しない以上は観念の同一が保たれ、それが称呼を類似に引き留めていると解釈する。

称呼のモーラ数が異なったとき、類似のままか非類

似になるかという問題への答えは、圧倒的に非類似への転換が観察されるケースにおいては迷いが少ないが、類似と非類似とが伯仲するケースにおいては、迷いが多くなり、その結果として、相反審決が発生する。相反審決が「ス」または「ズ」の語尾への付加に関して多くみられることは、そうしたあらわれである。

語頭に置かれた「THE」「ザ」は、英語の定冠詞であると認識されるものの、定冠詞本来の役割を認めず、「次にくる語を強調する」語という程度の評価に止まっている。このような評価は、定冠詞をもたない言語である日本語の世界においては、「THE A」において「THE」が英語において本来有する機能が発揮されないことを意味する。定冠詞の機能が発揮されない結果、商標の観念としては「A」が支配し、「THE」の有無が観念に実質的な影響を与えないことになり、両商標は類似とされるほかなくなる。この現象は、「観念が称呼を左右する」ひとつの表われといえることができる。

このような傾向は、近年になっても本質的な変化をみていない。類似の幅が狭くなりつつある（または狭くなった）という、類否判断における一般的な傾向は、「A」と「THE + A」との類否に関しても見られないわけではないが、それを考慮してもなお、英語の定冠詞が日本語に定着する見込みは、少なくとも当分は考えられない。

（原稿受領 2011. 10. 28）

